古典入門 ——『伊曾保物語』と『沙石集』——

I. 単元名 古典入門 ——『伊曾保物語』と『沙石集』—— (1年国語総合)

II. 生徒観

省略

III. 教材観

授業者自身が本校の古典学習において最も達成したいと考えているのは「古典を自分のものの見方、感じ方、考え方のルーツの一つとして尊重し、興味を持って読もうとする姿勢を育てる」ことである。そのため、古典の導入である本単元では特に、たとえば文法や語句のきまり、当時の慣習についての知識など、生徒の障壁になる要素が少ないものを選びたいと考えていた。

また、古典を学ぶ内発的動機づけのため、相互に発表する活動を取り入れたいと考えていたが、この時のヒントになったのが、2010年度国語教育全国大会、論理的文章表現のためのワークショップにおける広島大学・田中宏幸先生のご発言である。「『書きたい』という意欲を支えるのは、『自分が他の人とは違う情報をもつ』という『情報格差』だ」というのがご発言の趣旨であったが、古典内容の発表においても「情報格差」を生むことで意欲が高まるのではないかと考えた。そのため、生徒がグループ単位で読め、読んだ内容を相互に発表し合えるような、平易で短い文章をいくつか用意したかった。

最後に、今回の単元は「古典入門」だが、これはもちろん、「古典を自分のものの見方、感じ方、考え方のルーツの一つとして尊重し、興味を持って読もうとする姿勢を育てる」ための入門にしなければならない。ただ「読めた！できた！面白かった！」で終わってしまうような深まりのない単元では、授業の意味がない。そこで、生徒が、そして授業者自身も感動できる要素をもった文章を探していた。

本単元で扱うのは『伊曾保物語』と『沙石集』である。『伊曾保物語』は、紀元前6世紀のギリシャで寓話を語り、名声を得たとされる小アジア地方出身のイソップ（アイソーポス）の伝記や彼の語った寓話からなる原典に、中世ヨーロッパでキリスト教的価値観をもつ寓話や教訓が加わり、日本に伝わったものである。文禄2（1593）年、天草イエズス会がローマ字本『イソポのハブラス（Esopono Fabulas）』として出版したのち、江戸初期には仮名草子として相次いで出版された。異本はあるがいずれもイソポの伝記（「一休ばなし」「吉四六ばなし」のような知恵ばなしが中心）からなる前半部分と、イソップが語ったとされる各種の動物寓話からなる後半部分に分かれており、現代に広く知られているのはこの後半部分である。

一方の『沙石集』は鎌倉後期に無住法師によって編まれた仏教説話集である。庶民を仏道に導くことを意図し、日本・中国・インドの諸国に題材を求めた説話を例に引きつつ、仏教の要旨や処世訓などを説いており、古典入門期の教材として教科書に収録されている「児の飴食ひたること」「ねずみの婿とり」もこの作品に含まれている。

これらの教材を用い、第一次では『伊曾保物語』の平易な動物寓話を教材に用いて、生徒が古文に親しみながら仮名遣いのきまりを習得できるようにしたい。特に、授業者自身はこれまで班や個人での活動を単元の終末に組み入れ、生徒の思考ないしは興味関心を拡散させたまま学習を終えることが多かったが、今回の単元において、班学習を単元の導入におくことで、生徒が自主的に取り組むことで生まれた関心や習得した技術を、第二次で効果的に収斂させることができるのではないかと考えている。

また、第二次では『伊曾保物語』の伝記（前半部分）に収録されている「商人、金を落とす公事の事」と『沙石集』に収録されている「正直の人宝を得る事」の共通性を足がかりに、基礎的な語句や文法事項について学習・習得させたいと考えている。そして、なによりも、鎌倉後期の仏教説話集と、古代ギリシャに由来しヨーロッパで広まったイソップの伝記にほぼ同じ話が含まれていることへの感動を生徒と共有したい。おそらくインドから小アジアにかけての地域で発祥した物語の類型が、一方では仏教説話として中国から日本に、他方ではヨーロッパでキリスト教的価値観に支えられながら日本に入ってきたという事実から、生徒は、「おもしろい」「役に立つ」という思いは国境も時代も越えるのだ、と実感することができるだろう。また、（ここでは古文の）学習をとおして言語に関わる文化の広がりに思いを馳せることにより、学びの面白さや価値に生徒が気づいてほしい、とも考えている。

本単元のテキストには、岩波文庫『伊曾保物語』および、小学館『新日本古典文学大系 52・沙石集』を使用した。また、実態に応じてルビを振る・仮名に直すなどを行っている。

IV. 単元の目標

- 『伊曾保物語』に収録されている動物寓話の内容や音読のしかたについてすすんで話し合い、手引きに従い内容をまとめて発表したり、他班の発表を聞いたりする。（話す・聞く能力）
- 登場人物の言動や心情を表現に即して読み取り、それぞれの話のおもしろさを感じる。（読む能力）
- 『伊曾保物語』と『沙石集』の相違点や類似点を考えたり、それぞれのルーツを考えたりしながら言語文化への関心を高め、以後の古典学習に意欲をもって取り組む。（知識・理解）
- 基本的な古語の意味や、助動詞「けり」および「係り結びの法則」などの基礎的な文法事項を習得する。（知識・理解）

V. 単元構成（全9時間）

第一次 古文の仮名遣いに慣れる（4時間）

- 第一時 古文の仮名遣いを知る
- 第二時、第三時 表現活動をとおして古文の仮名遣いに慣れる（事前）
- 第四時 読みと内容に関する発表する（本時）

第二次 共通点や相違点を考えながら、二つの話を古文で読む（5時間）

- 第五、六時 『伊曾保物語』「商人、金を落とす公事の事」を読む
- 第七時～第九時 『沙石集』「正直の人宝を得る事」を読む

	学習内容	主な学習活動	教師の支援
第一次	1 古典の仮名遣いを知る	○「犬、肉の事（教訓部分は除く）」を読み、古文と現代文の違いを指摘する。 ・促音や濁点、半濁点がない ・聞いた事のない言葉が出てくる ・文字と読みが違う部分がある	○本時は古典の仮名遣いについて学ぶと告げ、ワークシートを配布する。 ○「犬、肉の事」を音読する。

		<p>○五十音表といろは歌を書いてみる。</p> <p>○古文の仮名遣いや読みの決まりを知る。</p>	<p>○古典の仮名遣いのルールと五十音図、いろは歌についてワークシートを用いて指導する。</p>
2 3	<p>活動をとおして古典の仮名遣いに慣れる (第二時が事前授業)</p>	<p>○伊曾保物語「鶴と狼の事」「蟻と蟬の事」「蛙と牛との事」「男、二女を持つ事」について、班ごとに題材を選び、読みと内容の発表にむけて準備をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「犬、肉の事」の発表例を提示し、班に分かれて同じように読みと内容について発表することを告げる。 ・1班5人を想定し「大きな声で読む」「文章の内容を考える」「発表方法を考える」などの分担ができるようにしておく。 ・学習の進め方についてのワークシートを用意しておく。
4	<p>読みと内容に関する発表をする。 (本時)</p>	<p>○班ごとに担当の文章について、読みと内容に関する発表をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自で題材となる古文を黙読する。 ・班ごとに読みと内容を発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ① 読み担当が音読する。 ② 内容について発表する。 ③ 読み担当を中心に斉読。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表手順を確認し、発表順を決める。 ・それぞれの班について、何か一つはよさを見つけて称揚する。
		<p>○発表があった動物寓話に続く教訓を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表終了後、「犬、肉の事」の教訓部分を提示し、『伊曾保物語』の動物寓話の構成は「寓話+教訓」だと告げる。 ・各班が発表した話について教訓部分のみを提示し、それぞれどの話に続くものであるか考えさせる。
第 二 次	<p>5 6 『伊曾保物語』「商人、金を落とす公事の事」を</p>	<p>○『伊曾保物語』の構成について知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代に翻訳された『伊曾保物語』は、「伝記(知恵ばなし)+動物寓話」からなることを告げ、「伝記」部分を読もうと告げる。

	読む	<p>○「知恵ばなし」としていくつかの例を聞いた後、「商人、金を落とす公事の事」を読む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・傍注を活用し、生徒が内容をつかみやすいようにする。 ・前後半に分けて本文を提示し、生徒が先の展開を想像しながら読めるようにする。 ○以下の点に留意して指導する。 <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物と人称代名詞に気を付けて読めるようにする ・助詞を適切に補えるよう助言しながら読めるようにする。 ・助動詞は「なり」「けり」に軽く触れる程度で、活用についてもこの段階では触れない。 ・語句も「我」「汝」「給はる」「宣ふ」程度にする
		○この話において、感心した部分を話し合う。	
7 8 9	『沙石集』 「正直の人 宝を得る事」 を読む	<p>○『沙石集』の「正直の人宝を得る事」を読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習の「商人、金を落とす公事の事」と似た点や違う点を考える。 ・「係り結びの法則」について知る。 ・助動詞「けり」について、その意味と活用のしかたについて知る。 ・いくつかの古文単語の意味を覚える。 <p>○『伊曾保物語』「商人、金を落とす公事の事」との関連を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎時間、三分割した本文を提示して、生徒が先の展開を想像しながら読めるようにする。 ○以下の点に留意して指導する。 <ul style="list-style-type: none"> ・指示語の指す内容に気を付けて読めるようにする。 ・「係り結びの法則」について指導する ・助動詞「けり」について指導する ・古文単語「いやし」「いとほし」「いみじ」「ののしる」「おのづから」「ことわり」等について指導する。 ○インドから小アジアで発祥した話が東西に伝わり、日本で再び出会ったことの面白さに生徒が気づけるようにする。

VI. 本時案

(1) 学習内容 活動をとおして古典の仮名遣いに慣れる①

- 目標 ○前時に学習した読み方の決まりについての知識を活かして『伊曾保物語』の動物寓話を正しく音読することができる。(知識・理解及び読む能力)
- 『伊曾保物語』の動物寓話の内容や音読のしかたについて理解し、与えられた作業に積極的に取り組むことができる。(関心・意欲・態度)
- 準備物 プロジェクター、I p a d、活動用ワークシート、活動例の資料

	学習活動	授業者の支援	評価
導入 (10分)	○前時の振り返りをする。	○「犬、肉の事」について、何人かを指名し音読させる。 ○「犬、肉の事」がどのような内容の話であるかを確認した後、斉読させる。	正しく大きな声で音読している 【知識・理解及び読む能力】
展開① (15分)	○「犬、肉の事」が江戸時代の『伊曾保物語』≒現代の『インソップ物語』の話であると知る。 ○今後の学習内容を知る。 ○発表の題材を決める。	○「犬、肉の事」は『伊曾保物語』に収録されている話であることを話す。 ○ローマ字版『インソポのハブラス』および万治絵入本『伊曾保物語』の画像を示しながら、『伊曾保物語』はキリスト教宣教師が日本に持ち込み、日本語に訳されて江戸時代に出版されたものであることを話す。 ○前時に学習した知識を使って『伊曾保物語』の動物寓話を読み、班ごとに読みと内容の発表をすることを告げる。 ○「犬、肉の事」の発表例を示し、生徒が発表の完成形をイメージできるようにする。 ○「鶴と狼の事」「蟻と蟬の事」「蛙と牛との事」「男、二女を持つ事」について、それぞれ担当班を決めさせる。	伝統的な言語文化のあり方や発表内容・方法などについて関心を示し、自らの分担を積極的にこなそうとしている。 【関心・意欲・態度】
展開② (20分)	○発表の準備をする。	○発表の手引きとなるような、学習の進め方についてのワークシートを配布する。 ○全ての生徒が活動に参加できるようにするため「大きな声で読む」「現代語での説明を考える」などの分担を決めさせる。 ○机間指導により、全ての班がまずは正しく音読できるよう支援する。	
まとめ (5分)	○本時のまとめをする。	○各班で音読が正しくできていることを称揚し、次回も発表準備の続きをすると伝える。	

(2) 学習内容 読みと内容に関する発表をする

- 目標
- 担当した話について、はきはきと分かりやすく発表することができる (話す能力)
 - ワークシートにメモをとりながら他班の発表を聞くことができる (聞く能力)
 - それぞれの動物寓話に添えられた教訓を考えることができる (読む能力)
- 準備物
- プロジェクター、I p a d、スクリーン、発表に必要なもの

	学習活動	授業者の支援	評価
--	------	--------	----

導入 (5分)	○前時までの振り返りをする。	○第一時から第三時までの学習内容を話し、本時がこれまでの成果を確認する場であることを告げる。	
展開① (30分)	○『伊曾保物語』の読みと内容について班ごとに発表する。 ○他班の発表時、ワークシートに必要事項を書き込みながら聞く。	○「犬、肉の事」を例にして発表手順を確認する。 ○ 班ごとに発表の練習をする。 ○ 班ごとに発表する。 ① 班員が音読する。 ② 音読担当を中心に斉読する。 ③ 内容についての発表をする。 ④ 再度斉読する。 ○ワークシートに書きこみながら他班の発表を聞くよう言う。 ○それぞれの班について、何か一つはよさを見つけて肯定的に評価する。	声の大きさやスピード、抑揚に気をつけて発表等しようとしている。 【話す能力】 発表への関心を示しながら聞き、必要事項をメモすることができる。 【聞く能力】
展開② (10分)	○発表があった寓話に続く教訓を考える。	○発表終了後、「犬、肉の事」の教訓部分を提示し、『伊曾保物語』の動物寓話の構成が「寓話+教訓」であることを告げる。 ○各班が発表した話についての教訓部分のみを提示し、それぞれの話に続くものであるかを班で話し合わせる（時間的な制約がある場合は指名して答えさせる、もしくは提示・説明する）。 ○それぞれの寓話に付けられた教訓は、道徳的または処世的な観点からのものであると補足し、説話が庶民教育のためのものでもあったということを伝える。	文章の内容を的確に理解し、内容を考察している。 【読む能力】
まとめ (5分)	○これまでの4時間を振り返り、第二次につなげる。	○古文の読みに慣れてきたことを高く評価する。 ○音読と理解の深まりには関連があることを確認する。 ○次回、本格的な古文学習として『伊曾保物語』の動物寓話以外の話を読むと伝える。	

〈参考文献〉

- ・武藤禎夫校注『万治絵入本伊曾保物語』2000年 岩波書店
- ・小島孝之校注・訳『新編日本古典文学全集 52・沙石集』2001年 小学館
- ・小堀桂一郎『イソップ寓話』2001年 講談社
- ・遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究 続編』1984年 風間書房
- ・大塚光信『キリシタン版エソポのハブラス私注』1983年 臨川書店
- ・深井一郎「伊曾保物語における位相の問題——国字本と天草本との比較——」『金沢大学教育学部紀要』

人文科学・社会科学編』1978年

- ・濱田幸子「『伊曾保物語』と江戸時代におけるその受容について」『佛教大学大学院紀要 文学研究科編 第38号』2010年
- ・濱田幸子「『伊曾保物語』成立についての一考察——イソポの伝記を中心に——」『佛教大学大学院紀要 文学研究科編 第39号』2011年
- ・青木五郎・武久堅・坪内稔典・浜本純逸監修『クリアカラー国語便覧第四版』数研出版